



### 忘却の淵から

「一九四一年パリの尋ね人」……パトリック・モディアノ  
「凶説写真小史」……ヴァルター・ベンヤミン

本と人とは、ある日不思議な出会いをすることがある。何とその本は、街角の広々とした書店のコーナーで、出版したばかりの私の本の隣に、まるで双子のように、きちんと表紙を前にして、二冊並べて置かれていたのである。一九三〇年代パリと外国人芸術家たちをテーマに据えた私の本は、ハンガリーのユダヤ人写真家アンドレ・ケルテスのパリ写真で飾られている。その隣りの新刊本の表紙も、やはりケルテスののだが、「影」と題する、道路に伸びた四人の人物たちの影が、妙に生々しい。促されるように手に取り、早速買って帰る。

パトリック・モディアノ『一九四一年パリの尋ね人』（白井成雄訳、作品社）は、フランス語原題 *Dora Bruder*（ドラ・ブリュデール）。一九四二年にアウシュヴィッツで死亡した

同じく一九三〇年代を生き抜いたユダヤ人哲学者ハンナ・アーレントは、ナチスの強制収容所による殺人は、単なる死を個人にもたらしたのではなく、共同体の全体をガス室送りにする事によって、その個人にまつわる社会的〈記憶〉の全てを葬り去ってしまったのだと指摘している。アーレントの呼ぶ「忘却の穴」における死の隠蔽は、ある人間が「生きていた」というかけがえのない事実そのものまでを抹消する「完全殺人」なのである。

パトリック・モディアノは、その「忘却の穴」に抗してかすかな痕跡を探し、少女ドラの内面とその生涯を「書き残そう」とする。モディアノの執念は、自らの父がやはり占領下にユダヤ人として逮捕されたという個人的事情とも深く絡み合っている。モディアノの父は運良く脱走に成功するが、しかし地上に戸籍を一切もたない闇のブローカーとして、アウトロの謎の人生を歩む。「私は占領時代の汚物から生まれた」と言ってはばからないモディアノは、偶然にも、自分と同じ裏街に子供時代を送ったドラ・ブリュデールの姿を求めて、現代のパリの街路を、ひたすらに彷徨うのである。モディアノと共に歩いていくと、予想に反して、パリ周縁地区が

（と推定される）全く、無名の少女の名前である。

ある日、一九四一年の『パリ・ソワール』紙をめくっていた作家モディアノは、偶然にも、ドラ・ブリュデールという行方不明の娘の所在を尋ねるある父親の尋ね人広告が、目に止まった。ドラ・ブリュデールとは、一体どんな少女なのだろうか……。全ての探索が、そこから始まる。

この書物は、モディアノがそれから十年もの歳月をかけて、ようやく一九九七年に出版した「調査報告」である。もとより、ドラ・ブリュデールについての書類や記録は、地球上のいかなる場所にもほとんど残されていない。占領下フランスのナチスやそれに加担したフランス側諸機関によって、故意に破棄され、抹殺されたからである。

何と劇的に「変化」しているかに気付き、私たちは「時間」の容赦ない重さに慄然とせざるを得ない。

さらに関連地図や年表、充実した訳註や解説を加えた翻訳者の気概が真摯に伝わってくる、敬服すべき訳業である。

また、訳者の丁寧な仕事ぶりが、原著と呼び合った効果を上げている本と言え、ヴァルター・ベンヤミン『凶説写真小史』（久保哲司編、ちくま学芸文庫）も、読者への嬉しい贈り物である。早くも一九三一年に、「写真」という新しいメディアに注目し、同時代写真についての哲学を展開したのが、後の「複製技術時代の芸術作品」（二〇三）と並ぶ名論文「写真小史」である。この文庫版邦訳が優れているのは、翻訳の質は言うに及ばず、発表当時八枚しか付いていなかった参考図版を、実に八十枚も挿入した点、さらに関連論文を三本加えることにより、詳細に、しかも多角的に「写真小史」を読み直す道をひらいた——ということである。ドラ・ブリュデールと同じく、やはりユダヤ人ゆえに亡命先フランスを経て、ピレネー山中で自死を選んだベンヤミンの著作が、時代の貴重な写真映像や資料と共に蘇る喜びを、あらためて味わいたい。

（いまはしいこ／比較文学・比較文化）